

世界の最高峰

特許技監 櫻井 孝

随分前のことになるが、ヒラヤマさんというとても温厚な先輩がいた。その先輩をつかまえて、「ヒラヤマ、ヒマラヤ、ヒヤラマ、ヒラマヤ。さて、世界の最高峰はなんでしょう?」という謎かけをした。先輩は、これは何かあるなという警戒感に満ちた顔をされながらも、「ヒ・マ・ラ・ヤ」と一音一音区切りながら慎重に返答された。「ブー。残念ながらバツです。答えはエベレストです。」と言ったら、けっこう叱られた。古典的な言葉遊びだが、今でもときどき引っかかってくれる人がいるので、自分は懲りずに楽しんでいる(ヒラヤマ先輩、本当にごめんなさい)。

エベレストはヒマラヤ山脈の中にあり、標高は8,848m、ネパールと中国との国境にそびえている。このあたりまでは知らない人はいないだろうが、エベレストの正しい位置をご存知の方はどれほどいるだろうか。以前このコラムで、自分はニューデリーからブータンに2度出張したと書いたが、とりわけニューデリーとエベレストとティンブー(ブータンの首都)の位置関係となると、ニューデリー日本人会の忘年会でクイズに出題されみんな頭を抱えたほどに、ちょっと難しい問題である。もちろん経度で見れば、ニューデリーが一番西で、エベレスト、ティンブーと順に東に位置するのだが、緯度で見ても、実は一番北に位置するのが

ニューデリー(北緯28度36分)、次がエベレスト(同27度59分)、最後がティンブー(27度28分)という順番になる。つまり、ニューデリーからブータンに飛行しようとする、微妙なところではあるがエベレストを左手に見ながら南東方向に飛ぶことになるのだ。

ブータンは山国だから、飛行場を造れるような平地がほとんどない。唯一、首都ティンブーの西方、車で1時間ほど走ったところにあるパロ谷に、1本きりの滑走路を造って空港とした。最近はどうか知らないが、自分がインドに勤務していた頃は、このパロ空港に降りる飛行機は、ブータン国営のドゥルックエアのものだけであった。しかも、このドゥルックエアの保有する飛行機は1機(四発の小型ジェット機BAe146)だけ。その1機をニューデリーとの間で週2回運行していた。

自分はこの飛行機に往復で計4回乗ったことになるが、そのうちヒマラヤ山脈がきれいに見渡せたのは1回きりであった。ほかの3回は、ヒマラヤ山脈とは反対側の席に座ったか、あるいは曇っていて何も見えなかったか、詳しくは記憶していない。しかし、その1回きりのフライトのことは今でも鮮明に記憶している。残念ながらどのピークがエベレストであるのか、実際の山には地図に書かれたような表示はないので確たることはわからなかったのだが、おそらくあれがそうであろうというピークを機窓から写真に撮ることもできた。もっとも、今になって思えば、写真に撮ったのは少し手前にそびえるヌプツェ(標高7861m)ではなかったかと思える。しかし、切り立った稜線はいずれもカミソリの刃を思わせるようで、しばし飛行機の窓に貼り付いて見とれていたことを思い出す。

さて、人類のエベレスト初登頂は、1953年5月29日に英国の遠征隊によって成し遂げられた。このエベレスト初登頂への歴史は長い。Wikipediaの「エベレスト」の項に詳しく述べられているが、英国の第一次エベレスト遠征隊が送られたのは、今から90年以上も前の1921年のことだ。翌1922年に第二次遠征隊、さらに1924年に第三次遠征隊が送られるが、第三次遠征隊に不始末があって、その後9年間はエベレストへの入山許可が下りなかった。1933年に第四次遠征隊によって登山が再開され、1938年の第七





【図1】エベレスト人類初登頂の記念切手2種のうち1種(1953年10月2日発行：ギボンズ#345)



【図2】インド隊によるエベレスト初登頂の記念切手(1965年8月15日発行：ギボンズ#503)

次遠征隊までが続くが、その後は第2次世界大戦で一時中断、戦争終結後に再び遠征が始まる。

実は第2次世界大戦まではネパールが鎖国政策をとっていたため、戦前はチベット側から登るのが唯一のルートだった。しかし、戦後になってネパールが鎖国を解き、逆に中国の政策でチベットからのルートが閉鎖されたため、戦後はルートを変えてネパール側から登ることになる。そして各国が初登頂の栄誉を狙うなか、前述したとおり、1953年に英国隊のエドモンド・ヒラリーとシェルパのテンジン・ノルゲイが人類としての初登頂に成功したのである。

ちなみに、日本人として初登頂に成功したのは松浦輝夫と植村直己で、1970年5月11日のこと。インド隊はそれよりも早く、1965年5月20日に初登頂に成功している。インド隊の場合は、5月20日から29日までの間に4回のアタックに成功、9人が頂上を踏みしめたと伝えられている。

インドでは、ヒラリーらによるエベレスト初登頂と、インド隊の初登頂を記念して、それぞれ1953年と1965年に記念切手を発行した【図1】【図2】。

ところで、このような記念切手はよくあることだが、インドの切手関係のマテリアルを集めていると、これらの記念切手とは別に、エベレストを描いた奇妙な古い切手様のもに出会うことがある。裏面には糊が付いているが、額面も発行国も記載されていない、切手のように切手ではないもの【図3】。よく見ると、エベレストのデザインの周囲の枠の部分に時計回りに、1924、SIKKIM、TIBET、NEPALと書かれているのがわかる。実はこれ、不始末から当時のドライ・ラマを怒らせ、以後9年間入山許可がもらえなく

なるような事態を引き起こしてしまった英国の第三次遠征隊が、その遠征に際して特別に作ったものなのだ。

さらに、この切手様のラベルだけではなく、エベレストの写真と特別なメッセージを印刷したハガキも作成した。この第三次遠征隊は、1924年にインドのダーズリンからシッキム王国(当時)を経てチベットに入り、ロンブク(Rongbuk)にベースキャンプを設けたのだが、ハガキに印刷された写真には、そのロンブクのベースキャンプから見たエベレストの姿だと注釈がある。そのハガキに前記ラベルとインドの郵便切手を貼り付け、特別の赤いゴム印(中央に「ロンブク氷河ベースキャンプ」と書かれている)を押した上で、カルカッタ(現コルカタ)の郵便局から関係者に宛てて郵送した。郵便切手に押された消印は、1924年10月21日と読める【図4】【図5】。

このハガキの裏面の一番下の部分には、四角の枠囲みで「この偉業(great exploit)のフィルムは、1924年11月、ロンドンのスカラ座を皮切りに、全国で上映されるであろう」と書かれている。要するにこのハガキは、遠征隊の記念品的な意味合いのほか、遠征の記録映画を上映するに先立ち、その宣伝用に送付されたダイレクト・メールのような役割も持っていたのではないと思われる。手書きの文字は、遠征隊長J.B.L.Noelの署名を印刷したものである。

こんな手の込んだことをしたのは、後にも先にもこの第三次遠征隊だけだ。結果はともかく、この遠征には相当に気合が入っていたということだろうか。第三次遠征隊は、第四キャンプから頂上に向かったマロリーとアーヴィンが行方不明となって山を下りるが、マロリーの遺体は1999年に標高8,160m付近で発見される。Wikipediaによれば、マロリーは登頂に成功していたのではないかとの説を唱える人も多いと言う。



【図3】英国第三次遠征隊が作成したラベル。裏面には糊がついている。(1924年)



【図4】英国第三次遠征隊が郵送したハガキ。カルカッタにて投函、このハガキの宛先はオランダのロッテルダム。郵便切手に押された消印は1924年10月21日。郵便切手の肖像はジョージV世(ギボンズ#165)。



【図5】同ハガキの裏面